King Lear の世界

佐々木　　隆

序

King Lear は *Shakespeare* の作品中最も偉大であると言われている[1)]。しかし，だからと言って *King Lear* に何の問題もないわけではない。Maynard Mack の言う通り "*King Lear* is a problem."[2)] なのである。Mack は *King Lear In Our Time* の中で，現代における *King Lear* がどのように歪められているかを示し，時代を越えた真の *King Lear* の本質に迫ろうとした。

King Lear が各時代によってどのように受け入れられていたかは，上演史を見れば明らかとなろう。特に Nahum Tate の改作は1681年以来1838年の W. C. Macready の上演まで一世紀半以上にわたる長い間，舞台にのせられていた。Tate の改作では，Lear は最後に再び王位に就き，Cordelia は Edgar との愛を実らせ，happy ending に終わるのである。また，Fool は登場しない[3)]。Tate の改作がどうあれ，最も長い上演記録を持っていることは事実である。Tate の改作に代表されるように，*King Lear* の最大の問題点は結末にある。Tate の改作が happy ending なのは，結末があまりにも悲惨で堪えられなかったからだ。Charles Lamb も同じような理由で上演不可能論を唱えた。

> It is too hard and stony; it must have love-scenes, and a happy ending.

It is not enough that Cordelia is a daughter, she must shine as a lover too.[4)]

Tate に改作され，Lamb に上演不可能論まで唱えさせた *King Lear* の厳しい結末にはどうのような意味があるかを考えてみたい。

1. Double Plot

King Lear の最大の特徴は，Double plot にあると言ってさしつかえないだろう。Lear を中心に展開する Main plot と，Gloucester をめぐる sub plot がある。この double plot は冒頭から展開されている。Kent と Gloucester は Lear の領土分配についての噂話をし，それから Edmund へと話題が変わる。この冒頭のわずか33行の中に，これから展開される悲劇の発端が示されているのだ。この冒頭33行について分析を加えてみたい。

1－6行は main plot への導入となっている。導入部分では，比較したり，評価に関する表現が多い[5)]。Kent とGloucester は Albany と Cornwall を比べているが，やがて Gloucester は Edgar と Edmund, Lear は Goneril, Regan と Cordelia を比べることになる。Gloucester は息子について判断をあやまり，Lear は娘について判断をあやまり，共に苦難の道を歩むことになる。main plot と sub plot は「親と子」という共通の問題をかかえている。7－33行は sub plot への導入となっている。ここでは whoreson (1. 1. 22) である Edmund の方が by order of law (1. 1. 18–19) の Edgar よりも可愛いなどと Gloucester が言っている。宮廷では慎まなければならないような話を，このように堂々と話していることは，the division of the kingdom (1. 1. 14) と共に，この国に何かよからぬ事が起こるのではないかという印象を与えている。

冒頭で the division of the kingdom がほのめかされ，disorder のイメージが与えられている。英国最初の悲劇と言われている悲劇 *Gorboduc, or Ferrex and Porrex* の冒頭も Gorboduc がふたりの息子 Ferrex と Porrex に

領土を二分して譲る the division of the kingdom から始まっている。この division, divide は第二場の sub plot の展開の中でたびたび使用されている。特に Gloucester が日蝕と月蝕に言及している個所は，その典型であろう[6]。この Gloucester の言及に対して Edmund は真向から反論している[7]。このふたりの言葉から判断すれば，Gloucester が因襲的な考え方を代表し，Edmund が合理的な考え方をしている。Edmund は Gloucester などの一般の人々が信じている迷信，占星術の非合理性を指摘している。

このほか Edmund によって用いられた division は，日蝕と月蝕の説明の中で二度使用されている[8]。さらに Kent は Albany と Cornwall の間に division (3. 1. 19) があると言っている。

> There is division,
> Although as yet the face of it be cover'd
> With mutual cunning, 'twixt Albany and Cornwall; . . . (3. 1. 19-21)

この Kent の言葉は Gloucester によってもう一度 "There is division between the Dukes." (3. 3. 9) と繰り返されることになるのだ。冒頭で示された the division of the kingdom は劇の進行と共に具体化され，ますます disorder のイメージを深めていくのである。

日蝕と月蝕に関する Gloucester の言及は，大宇宙の秩序と国家の秩序には相互関係があることをほのめかしている[9]。同じ考え方は，*Troilus and Cressida* の中でも見られる。

> The heavens themselves, the planets, and this centre,
> Observe degree, priority, and place,
> Insisture, course, proportion, season, form,
> Office, and custom, in all line of order; . . .
> Then everything includes itself in power,
> Power into will, will into appetite;
> And appetite, an universal wolf,

So doubly seconded with will and power,
Must make perforce an universal prey,
And last eat up himself. Great Agamemnon,
This chaos, when degree in suffocate,
Follows the choking.
(1. 3. 85-126)

disorder のイメージは，Lear の家族と Gloucester の家族にもその影を落とすわけである。main plot では Lear の愛情テストによって，sub plot では Edmund の手紙のトリックによって，家族間に不和が生じる。この両家の不和の原因が，財産に関係していることは見逃せない事実である。しかも fortune という語は「運命」の意味もあることを考えると，財産分与がこれからの運命を左右することを暗示することになるのだ。

Lear は三幕二場のあらしの場面，Gloucester は三幕六場で両眼をえぐり取られる場面を経で，共に成長していくのである。ふたりが成長するには，この試練は重要な意味がある。そのことは，この試練の前後の両者を見ればその変り様はあきらかである。Lear は Cordelia と，Gloucester は Edgar とそれぞれ和解する。和解したのも束の間，Cordelia は死に，Lear はその後不帰の客となるのだ。Gloucester はあわれな Tom が実は息子 Edgar であることを知った上で絶命する。この両者の試練に対する態度は Gloucester の言葉に反映されている。

I stumbled when I saw: full oft 'tis seen
Our means secure us, and our mere defects
Prove our commodities. (4. 1. 20)

この考え方は，*Timon of Athens* の中で Timon が "nothing brings me all things." (5. 1. 186) や，*Richard II* の

But whate'er I be,
Nor I, nor any man that but man is,
With nothing shall be pleas'd till he be eas'd
With being nothing. (5. 5. 38–41)

の言葉にそれぞれ反映されているのだ。

2. Cordelia の nothing

King Lear の特徴が double plot にあることはこれまで見て来たが，main plot と sub plot に共通して流れているのは「親と子」のテーマである。Cordelia が敢えて "According to my bond" (1. 1. 92) と口にするのもその現れかもしれない。また，France 軍がイギリスに上陸するが，Shakespeare は France 王の扱い方にも充分に気を配っている。

Cordelia の夫 France 王は，軍隊を率いてイギリスに上陸するが，France 王自身は突然帰国するのである。

Kent. Why the King of France is so suddenly gone back know you no reason?
Gent. Something he left imperfect in the state, which since his coming of forth is thought of, which imports to the kingdom so much fear and danger that his personal return was most required and necessary. (4. 3. 1–6)

これ以後 France 王の姿は消えてしまう。もし France 王が居れば政治的国家的な乱れは免れない。France 軍出征の目的は，あくまでも Lear の救出である。Cordelia の行動も王妃としてではなく，Lear の第三女としてである。「親と子」の問題にテーマを限ろうとしている現れである。

Lear の愛情テストの場で Goneril と Regan が美辞麗句を並べたてているのに対して，Cordelia が口にする言葉は Lear にとっては衝撃的である。

Lear. . . . what can you say to draw
A third more opulent than your sisters? Speak.
Cor. Nothing, my lord.
Lear. Nothing!
Corn. Nothing.
Lear. Nothing will come of nothing.
Speak again. (1. 1. 84–89)

Lear にとって，Cordelia の "Nothing" という答えは全く意外であったであろう。この "Nothing" という一語は，"Nature" と共に *King Lear* では頻繁に用いられていることは周知の通りである。Lear は Cordelia のこの意外な答えに対しても，まず "Speak again" (1. 1. 89) と言い，次に "Mend your speech a little." (1. 1. 93) と言い，さらに "But goes thy heart with this?" (1. 1. 104) と Cordelia を勘当する前に，少なくても三回は言い直す機会を与えている。これに対し Cordelia が初めてまとまった説明をする。

I love your Majesty
According to my bond; no more nor less. (1. 1. 91–92)

"According to my bond" からもわかるように，「親と子の絆」を正面に出している。これ以後の Cordelia の言葉は，Lear をどのくらい愛しているかという告白よりも姉達への反発が主題になっている。従って姉達への怒りが "Nothing" の一語を生み出しているのである。Cordelia は Goneril が父への愛情表現を言い終えた後で "What shall Cordelia speak? Love, and be silent." (1. 1. 61) と独白し，さらに Regan が言い終えた後で，

Then poor Cordelia!
And yet not so; since I am sure my love's
More ponderous than my tongue. (1. 1. 75–77)

と独白する。この2回の独白の後，Cordelia が口にする言葉は，“Nothing” である。この “Nothing” は独白を除けば Cordelia がはじめて口にする言葉である。

Cordelia が何故 “Nothing” と言ったかと言えば，Goneril や Regan の巧言麗色に腹を立てていたからだ。Cordelia の “Nothing” は，Goneril や Regan のように言葉で飾り立てて言うことはないということであって，Lear に対する愛情が「ない」ということではないのだ。Cordelia が France 王に促されて最後に別れの挨拶を述べる時も

The jewels of our father, with wash'd eyes
Cordelia leaves you. I know you what you are;
Your faults as they are named. Love well our father.
To your professed bosom I commit him;
But yet, alas, stood I within his grace,
I would prefer him to a better place.
So, farewell to you both. (1. 1. 268–275)

と言って，ようやく父 Lear の身上を，言葉に出して心配するようになるのだ。Gordelia は Goneril と Regan のことはやくわかっていたので

Time shall unfold what plighted cunning hides,
Who covers faults, at last with shame derides
Well may you prosper! (1. 1. 280–282)

とふたりの姉に挨拶すると，France 王と共にブリテンを去るのだが，Cordelia は父 Lear に勘当されたとは言え，父に別れの挨拶らしきものさえしていない Cordelia の頭の中にあるのは，父 Lear に対する思いやりではなく，姉達への強い反発心なのである。また，Cordelia が最後に口にするのは，

We are not the first

Who with best meaning have incurr'd the worst.
For thee, oppressed King, am I cast down;
Myself could else out-frown false Fortune's frown.
Shall we not see these daughters and these sisters? (5. 3. 3-7)

である。Cordelia の心にあるのは，ふたりの姉のことなのである。

3. Lear の成長

Lear は愛情テストを行なった結果，Goneril と Regan にひどい仕打ちを受け，あらしに曝されるなど様々な試練や苦難を経験を経て，傲慢ではなくなっている。Cordelia を勘当し，Goneril と Regan のもとでひどい仕打を受けた Lear は，怒りの中にもこれまでにない変化を見せている。

I'll forbear;
And am fallen out with my more headier will
To take the indispos'd and sickly fit
For the sound man. (2. 4. 107-110)

と早くも Lear の人格の進展が見られる。己れのことだけでなく，娘婿に対してまで気を使っている。Goneril と Regan から手ひどい仕打ちを受け，Lear は "You heavens, give that patience, patience I need." (2. 4. 270) と叫ぶのだが，その直後に "I will have such revenges you both." (2. 4. 278) などと言っている。Lear は嵐の中へ飛び出して行くと

No, I will be the pattern of all patience
I will say nothing. (3. 2. 37-38)

と叫ぶのである。しかし，Lear にとって "patience" がどういうことなのかこの時点では，また完全にはわかっていないのだ。それは，

I am a man
More sinn'd against than sinning. (3. 2. 59-60)

の言葉からもわかる。Lear は自己肯定することによって運命を呪っているからだ。しかし，今までの Lear ならば，ここで天を呪ったり，ひどい言葉を口にするが，今の Lear はこれまでの Lear とは違うのである。Lear は Fool にさえ気を使うようになっている。

Poor Fool and knave, I have one part in my heart
That's sorry yet for thee. (3. 2. 72-73)

今まで自分のことばかり考えていた Lear が他の人に対して心を向けていることは，注目に値する。一方，これを聞いた Fool は

He that has and a little tiny with,
With heigh-ho, the wind and the rain—
Must make content with fortunes fit,
Though the rain it raineth every day. (3. 2. 74-77)

と歌い，Lear もこの Fool の人生観に納得するのである。ここを turning point にして Lear は急激に変化していくのである。Lear はこれまでに "forbear" とか "patience" という言葉を何回か口にしてきたが，確かに「忍耐」というものが必要だと思いはじめてはいる。そして，嵐にうたれ，Fool の歌を聞き，「忍耐」とは「運命を受け入れること」，「運命に従うこと」であると知るのである。今まではただ口にしていただけの言葉に，本質が加えられたのである。人生観に開眼した Lear は当然のことながら

. . .: unaccommodated man
is no more but such a poor, forked animal as thou art. (3. 4. 105-

107)

と人間の本質まで迫るのである。

Lear は Goneril と Regan に対して呪いの言葉さえも浴びせていたが，turning point を境にして，もはや「呪い」の言葉を口にすることなく，Goneril と Regan を模擬裁判にかけるように変った。これも，視点が主観的なものから客観的なものになったことを示しているのだ。

結び

Cordelia は父 Lear への深い愛情からと言うよりは姉達への怒りから "nothing" を口にするが，Cordelia の思いもかけぬ言葉を聞いた Lear は，"Nothing will come of nothing." (1. 1. 89) と Cordelia に言い返す結果になっている。Cordelia の姉達への怒りから口にした "nothing" が Lear の怒りを買い，Cordelia のもとに戻って来ることになった。

Lear もまた，Cordelia に向けた言った "nothing" が自分のもとに戻ってくることになるのだ。Lear は「忍耐の鏡」になってみせようと言いつつ "I will say nothing" (3. 2. 38) と "nothing" を口にするが，この時点では，「忍耐」とは "nothing" と言うことであった。しかし，Lear は嵐の場面を通して，「忍耐」とは「運命を受け入れること」だと学ぶのである。Lear がすでに息絶えた Cordelia を抱いて登場すると，

And my poor fool is hang'd. No, no, no life.
Why should a dog, a horse, a rat have life,
And thou no breath at all? Thou'lt come no more.
Never, never, never, never, never.
Pray you undo this button. Thank you, sir.
Do you see this? Look on her. Look, on her lips.
Look there, look there! (5. 3. 304-311)

を最後に息絶える。Lear は Cordelia の死を歎き悲しんではいるが，その死をしっかり受け止めている[10]。Mack は *King Lear* の結末に対して

> We face the ending of this play, as we face our world, with whatever support we customarily derive from systems of belief or unbelief.[11]

と言い切っている。Shakespeare の tragic vision は

> . . . it is to learn to love only to lose (soon or late) the loved one, and to reach a ripeness through suffering and struggle, only to die.[12]

なのであり，結末の Cordelia と Lear の姿そのものである。また，Jan Kott は "The theme of *King Lear* is the decay and the fall the world."[13] と言っているが，Lear が人間として成長している以上，*King Lear* を "the decay and the fall of the world" とは言い切れない。Lear を成長させたのは「忍耐」である。Fool の歌から「忍耐」とは「運命を受け入れること」であると，年老いた Lear は学ぶ。Gloucester も Lear と同じ様に「忍耐」を学ぶのである。しかし，また若い Edgar は単に「忍耐」することを学んだのではない。

> Men must endure
> Their going hence, even as their coming hither:
> Ripeness is all. (5. 2. 9–11)

Edgar は，「忍耐」は必要であるが，結局は "Ripeness is all." がそれ以上に必要であると言っているのだ。Lear や Gloucester にはこの姿勢があっただろうか。ふたりの姿勢はあくまでも "Thou must be patient." (4. 6. 180) にとどまる。では，Cordelia はどうだろうか。Lear に対する愛情には満ち溢

れてはいたが，結局は姉達への怒りが最後まで心の奥に潜んでいたのだ。*King Lear* の厳しい結末には，生き方に対する厳しい問いかけがなされているのだ Lear 父娘と Gloucester 父子の中で，Edgar だけが生き残るのは「忍耐」がすべてではなく，「忍耐」から，さらに人生のあり方を知るに至ったからだ。

Text:

Peter Alexander, ed., *The Alexander Text of William Shakespeare The Complete Works* (Collins, 1983)

Notes:

1) A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (The Macmillan Press, 1981) p. 243. "*King Lear* has again and again been described as Shakespeare's greatest work, the best of his plays, the tragedy in which he exhibits most fully his multitudinous powers; and if we were doomed to lose all his dramas except one, probably the majority of those who know and appreciate him best would pronounce for keeping *King Lear.*"
2) Maynard Mack, *King Lear In Our Time* (University of California Press, 1965) p. 3.
3) J. D. Wilson, "The Stage-history of King Lear", *The Works of Shakespeare King Lear* (Cambridge University Press, 1979) p. lvii.
"Tate had remodelled the play, making three major alternations: the happy ending which everyone has heard of; a love-story, of Edgar and Cordelia, running through the whole play (France and Burgundy are cut out); and the omission of the Fool."
4) Joan Coldwell, ed. *Charles Lamb on Shakespeare* (Colin Smythe, 1978) p. 37
5) Terence Hawkes, "Love' in *King Lear*' (1959); reprinted in *Casebook Series King Lear* (The Macmillan Press, 1982) p. 177.
"'*O. E. D.* gives as a developed meaning of Love, v^2. (OE. *lofian* 'praise') 'to appraise, estimate or state the price or value of'. This is an entirely different word in origin and phonetic history from *Love,* v^1. (OE. *lufian*), and was not originally a homophone of it." (第一幕第一場について言えば，value や weigh などの評価に関する表現が多いが，Terence Hawkes は"love"にもその意味合いが込められていると言及している。)
6) These late eclipses in the sun and moon portend no good to us. Though the wisdom of nature can reason it thus and thus, yet nature finds itself

scourg'd by the sequent effects: love cools, friendship falls off, brothers divide; in cities, mutinies in countries, discord; in palaces, treason; and the bond crack'd 'twixt son and father. This villain of mine comes under the predicition: there's son against father. The King falls from bias of nature: there's father against child. We have seen the best of our time: machinations, hollowness, treachery, and all ruinous disorders, follow us disquietly to our graves. Find out this villain, Edmund; it shall lose thee nothing; do it carefully. And the noble and true-hearted Kent banish'd! His offence, honesty! 'Tis strange. (1. 2. 100–119)

7) This is the excellent foppery of the world, that, when we are sick in fortune, often the surfeits of our own behaviour, we make guilty of our disasters the sun, the moon, and stars; . . . (1. 2. 120–124)

8) Edm. I promise you, the effects he writes of succeed unhappily; as of unanturalness between the child and the parent; death, dearth, dissolutions of ancient amities; divisions in state, menaces and maledictions against king and nobles; needless diffidences, banishment of friends, dissipation of cohorts, nuptial breaches, and I know not what. (1. 2. 137–142)

10) E. M. W. Tillyard, *The Elizabethan World Picture* (Penguin Books 1972) p. 96

"It was a commonplace that order in the state duplicates the order of the macrocosm."

11) Maynard Mack, p. 114.

"he dies, reviving in his heart the hope that Cordelia lives."

A. C. Bradley の主張は，センチメンタルな結論であり，Mack はこれを退けている。Bradley の主張は次の通り。

"These are the last words of Lear. He is sure, at last, that she *lives:* and what had he said when he was still in doubt? . . . To us, perhaps, the knowledge that he is deceived may bring a culmination of pain: but, if it brings *only* that, I believe we are false to Shakespeare, and it seems almost beyond question that any actor is false to the text who does not attempt to express, in Lear's last accents and gestures and look, an unbearable *joy.*" (*Shakespearean Tragedy,* p. 291)

11) Maynard Mack, p. 116.

12) ibid., p. 79.

13) Jan kott, tr. By Boleslaw Taborski, *Shakespeare Our Contemporary* (Methuen 1981) p. 120.

Jan Kott はさらに次のように述べている。

"The play opens like the Histories, with the division of the realm and the king's abdication. It also ends like the Histories, with the proclamation of a new king. Between the prologue and the epilogue there is a civil war. But unlike the Histories and Tragedies, in *King Lear* the world is not healed again." (p. 120.)